天台大師の教相論について

――関口博士の所論に関連して――

佐藤哲英

一

関口博士の五時八教廃棄論は、昭和四十二年に発表された「五時教判論」（天台学報八）に端を発し、爾来十年間に順次にこの研究を推進されて、昭和四十七年度、昭和四十八年度、昭和四十九年度にはそれぞれ四つずつの論文を、さらに昨五十年度には五つの論文が発表されている。ところがこの廃棄論の主張は従来の伝統的教判論を根本から見直して、従来の伝統にとらわれない天台大師教学の樹立を志向されたものではあるが、今までの発表はあまりにも破邪の面が強すぎて、博士の真意がいずこにあるかもはかりがたい面があつた。そこで一昨年度の東洋大学での学会では、同学の浅田正博君とともにいくつかの疑義を提示し、一問一答の形式で博士の真意をたしかめたのである。（関口博士の五時八教廃棄論への疑義）（本誌二三の二）、これに対し、昨年度の大谷大学での学会では、関口博士から「佐藤博士の疑義に対する疑義」として廿五ヵ条の質義が提示されたが、その席では回答する時間がなかつたので後日に執筆し「天台五時八教論について――関口博士の疑義二十五ヵ条に対する回答」を本誌（二四の一）に掲載した次第である。この私の回答に対してはいくつかの点について甚だ不適確だとか具体性を欠くとかという指摘もされてはいるが、こうやつて論争を進めてゆくあいだに両者間で意見の一致をみた点も少なくなかつた。本学会誌（二四の一）に発表された関口博士の「天台教相論について」を見ると、次のように記されている。

さて、佐藤哲英博士からの回答についてであるが、

一、天台大師には「五時八教」の成語はない。

二、天台大師には「化儀四教」「化法四教」乃至「化儀・化法」という用語もない。

三、天台大師においては、五時は「五味」に重点を置いて考えられなければならない。

四、天台大師には五時八教という概念の組織によつて教相または教判を述べているところはない。

五、五時八教とは、後世に降つてのシナ天台においての所産である。

六、五時八教にいう頓・漸・不定・秘密の四教と、天台大師が法華玄義、維摩経玄疏に説いている頓・漸・不定（秘密）の三教（四教）とは名同義異のものである。

などの諸点において、ようやくほぼ所見を同じうして来たようである。

ご指摘の如く、①私も天台大師の著作には五時八教の成語がなく、②天台大師には化儀四教・化法四教乃至化儀・化法の用語もないと見ている。③天台大師においては、五時は五味に重点がおかれている。また、④天台大師には五時八教の組織で教相または、教判を述べたところはなく、⑤五時八教はシナ天台における後世の所産とすることにも同意見であり、⑥五時八教にいう頓・漸・不定・秘密と法華玄義第十巻の頓・漸・不定や維摩経玄疏第六巻の頓・漸・不定・秘密とは名同義異であるとすることも賛成である。これらの諸点において同意見であるならば、当然五時八教廃棄論へ賛成してもよいではないかと関口博士は考えていられるようで、五時八教を天台大師が立てた教判であると説いたり、五時八教を天台学の綱要として講義することを止めていただけますか、それとも反対ですかという質問が出てきたのである。かかる疑義に対しては昨年度の学会誌上で極めて簡単ながらも一応の回答はしておいたが、ここに天台大師の教相論についての私の立場とその主張をのべて大方の批判をあおぎたいと思う。

二

はじめに天台学なる概念の規定から問題をはつきりさせておきたい。関口博士には「天台学とはなにか」[1]という論文があり、博士によれば天台学に二種の概念があるとされる。すなわち、その一は天台大師智顗の思想教学の研究を意味する天台学であり、他の一つは天台宗の宗学を意味する天台学であるとされている。これに対し、私も天台大師智顗の教学を特に「智顗教学」と呼んでいるので、この点で問題はないが、第二義の天台学の概念については、関口博士と私との間にニューアンスの相違があるようである。私は天台大師プロパーの教学を「智顗教学」と呼ぶに対し、天台大師以後に発達せる天台宗の教学をば、シナも日本もひつくるめて「天台教学」または「天台学」と呼びならわしている。しかるに関口博士によれば「われわれが宗祖としてあがめているのは伝教大師である。天台宗の宗学とは、もちろん宗祖大師への帰依渇仰とその思想教学の研究を中心としなければならない」[2]とされており、これは天台宗の宗徒としての関口博士としては当然

のことであろうが、私からすれば天台宗の宗学は、荊渓湛然以後、特に趙宋時代に発展せる「中国天台」と、伝教大師を基点として発達せる「日本天台」とを含めているので、両者間に広狭の差がありといわねばならぬ。いま当面の課題である五時八教の教判は、早くも荊渓湛然の著作の上に幾回かその用語が見られ、その門人の明曠の『天台八教大意』にいたつて化儀・化法の四教が組織づけられ、高麗の諦観の『天台四教儀』にいたつてその教判論が大成されているのである。この中国天台で形成されてきた教判論は、日本天台の初頭に立つ伝教大師の上に早くも影響が見られるばかりか、日本天台の発展過程でしばしば論議されてきたものである。

したがつて、関口博士の五時八教廃棄論に関しては、たしかに天台大師の全著作の上に五時八教の成語がないばかりか、五時八教と呼ばれる組織で教相や教判を説いているところもなく、化儀四教とか化法四教とかいう名称もないのだから、文献論の立場からすれば両者間に少なからぬ意見の一致をみているのである。そうなれば五時八教廃棄論に賛成してはどうかということになるが、関口博士がなんといわれようとも、法華経をもつて出世本懐の経とする天台教学を講ずるにあたつては、五時八教こそ不可欠の教判論であるとみている私としては、よしやこの教判論の組織大成は唐宋時代にあつたとしても、その思想の根源は当然天台大師の上にあつたにちがいなく、その思想的源流を天台大師の上に探りあてることが天台学徒の使命であると考えている。

三

天台大師の教相を論ずるにあたつて、関口博士は「教判」「教相」「教理」の概念を区別し、天台大師が「教相」として説いているのは法華玄義第十巻における大綱三種すなわち頓教、漸教、不定教の三種教相であり、これに対する教観二門の解釈を施したところに、天台大師の教相論の特色があるとされている。このご意見は至極ごもつともであり、この点で反論を試みようとする考などいささかもないのであるが、博士はこの主張をあまりにも強く押し出されるあまり、法華玄義第一巻の一巻教相にほとんど眼もくれていられないのでその真意をただしたところ、「私は決して一巻教相を無視しているのでもなければ否定しているのでもない」[3]と答えられている。たしかにその通りであつて、「教相と教理」[4]の論文においては、「教相三意」なる一項をもうけて一巻教相についても論述されてはいるが、その主要点は法華玄義第十巻の三種教相にありて、一巻教相のそれは教相の大意と原則をのべたものとみていられるようである。

かかる天台大師の教相論は関口博士の立場に立つかぎり、決して間違つていると思わないのであるが、ここにあえて疑難をさしはさまざるを得ないのは、天台大師の教相論に対す

る関口博士の見解と、それに対する私の所見とにいささかのずれがあるからである。それは関口博士があまりにも十巻教相の頓・漸・不定の三種教相を重視し、他の部分をかえりみられない点にあるかと思う。これに対し、私の見解を率直に申せば、法華玄義には第一巻に見られる「一巻教相」と、第十巻に見られる「十巻教相」との二ヵ所にその教相論がのべられてある以上、この両史料をば対等にながめて、そこに流れる思想の一貫性を追求すべきだとするのであつて、そのいずれか一方に立つて、天台大師の教相論の本意はここにあるとするが如き一方的見解はとるべきでないと私は考えている。そこで私は天台大師における教相論の基本的立場は、法華玄義第一巻における教相為三の文と、法華玄義第十巻における大意章によるべきだとするのが、公正妥当な見解であるとするのである。すなわち、法華玄義第一巻では七番共解の第一標章下に

教相を三と為す。一には根性融不融の相、二には化道の始終不始終の相、三には師弟の遠近不遠近の相なり。教とは聖人下に被らしむるの言なり。相とは同異を分別するなり。

（大正、三三、六一八三b）

の文がある。すなわち仏の一代説法にいろいろの差別があるのはなぜだろうか。それは仏が教えようとした目的にいろいろの差異があつたからではなく、これをうけとる衆生の側に根性の融と不融のちがいがあるからである。この機根の相違によつて権実偏円の教を説く必要から、そこに化道の始終と不始終のちがいを生じ、師弟の遠近と不遠近の差を生じはするが、ともに同一仏陀の説法である以上、その説法教化には終始一貫せる趣旨があつたというのであろう。そしてここには教相なる字義を釈して、教とは聖人下に被らしむるの言なり、相とは同異を分別するなりとあるが、この文こそ天台大師教相論の基本的立場を示した要文とみている。

つぎに法華玄義第十巻に眼をうつすと、この十巻教相の組織は（一）大意、（二）出異、（三）明難、（四）去取、（五）判教の五章からなつている。このうちの第五の判教相のはじめにある大綱三種にすわつて天台大師の教相論を立てていられるのが関口博士にして、「この五章のなかの第五の判教の一章の所説こそ、天台大師自身の教相判釈である」[8]として、そこに示されている頓・漸・不定の三教をもつて天台大師の教相論が語られている。これに対する私の見解は、天台大師の教相論の基本的立場を示す文は先に引用した法華玄義第一巻の文とともに、法華玄義第十巻の冒頭にある

大章第五に教相を釈せば、若し余経を弘むるには教相を明さざれども、義において傷るるなし。若し法華を弘むるには、教を明さざれば、文義闕くることあり。（大正、三三、八〇〇a）

の文であるとみている。この文は法華玄義第一巻にある「教

とは聖人下に被らしむるの言なり。相とは同異を分別するなり」の文と同一意趣の文とみるべく、天台大師のいう教相論は、法華経と法華経以外の余経との同異を分別することに基本的立場が置かれていたとみるのであつて、ここに関口博士と私との間に教相論に関する見解の相違があるのである。

五

つぎには頓・漸・不定の三種教相と化儀四教に関する問題である。法華玄義第十巻の大綱三種のもとには教観の二門に約して頓・漸・不定の三教が説かれており、関口博士はここに腰をすえて天台大師の教相論を主張されている。しかも維摩経玄疏第六巻にある頓・漸・不定・秘密の四教とは開合の差異にすぎず、ともに化法の三教・四教にしていわゆる化儀の四教ではないと強調されている。この点においては私も関口博士の主張に賛成であり、いささかの異論を挾むものではない。

ところが、「後世の学者が「化儀四教」と呼んだ頓・漸・不定・秘密の四教は、天台大師の文献にないのですか」と問えば、「ないのではない」[6]と答えられ、では「どこにあるのですか」と尋ねると、「法華玄義の第一巻にある」[7]と答えられながら関口博士は、なにゆえに化儀四教について語ろうとされないのだろうか。天台大師の教相論は法華玄義第十巻の三種教相に重点を置いて考察すべきだとする博士の主張をかれこれいうのではない。けれども同じ天台大師の教相論にはこれと違つた思想が厳然としてあるのである。すなわち法華玄義第一巻には、「化儀四教」という言葉こそないけれども、後になつて「化儀四教」にまとめられてゆく「頓・漸・不定・秘密」の用語も思想もここには明らかに見られる。すなわち、

○いかんが分別する。日の初めて出でて前に高山を照らすが如し。厚く善根を植えてこの頓説を感ず。頓説もと小のためにせず。小は座にありと雖も聾の如く唖の如し。……此は華厳の如し。
○次に幽谷を照らす。浅行偏に明かにして当分に漸く解す。此は三蔵の如し。……法の縁に被るに約せば漸教の相と名く。
○次に平地を照らす。……此れ浄名方等の如し。法の縁に被るに約せば、猶これ漸教なり。
○復義あり大人はその光明を蒙り、嬰児はその晴明を喪う。……具さに大品の如し。若し法の縁に被るに約せば、猶これ漸教なり。
○一時一説一念の中に備さに不定あり。……味味中悉く是の如し。此れすなわち顕露不定なり。秘密不定は其の義然らず。
○或は一座に黙し十方には説く。十方には黙し一座には説く。或は倶に黙し倶に説く。各各相い知らず、互に顕密となる。……復甚だ多しと雖も、また漸・頓・不定・秘密を出でず。

（大正三三、六八三b―六八四a）

関口博士のいわれるように、法華玄義第十巻には頓・漸・不定の三教があり、維摩経玄疏第六巻には頓・漸・不定・秘

密の四教があり、これらは化法の三教四教であるが、これと同時に、法華玄義第一巻には上記の如くやがて化儀四教に形成されてゆく頓・漸・不定・秘密の四教の用語も思想もあることは、何人も動かしがたい客観的事実ではあるまいか。

六

つぎには五味と五時との問題である。後世の天台教判では五時に重点が置かれているが、天台大師においてはむしろ五味に重点が置かれているといわれる関口博士の主張にも私は賛成である。但しこの説を強調されるあまり、「五時は五味に重点を置いた理解に改められるべきである」[8]とか、「五時は五味に重点を置いて考えられなければならない」[9]といい切られることは果してどうであろうか。佐藤泰舜師も指摘[10]されたように、法華玄義第一巻の教相は頓漸五味の説にちがいないが、華厳の三照と涅槃の五味の譬を用いて、頓漸二教を説明するのに、華厳・三蔵・方等・般若・法華の五時の対配がなされている事実を忘れてはならない。また法華玄義第十巻の教相は（一）大意、（二）出異、（三）明難（四）去取、（五）判教の五章よりなるが、その第一の大意章にははじめに若し余経を弘むるには教相を明さざれども、義に於て傷るるなし。若し法華を弘むるには教を明さざれば文義闕くることあり」といい、これについで教法の優劣を明すに華厳・阿含・方等・般若・涅槃と今経（法華）とを対比している。また第五の判教の一章は、（一）挙大綱、（二）引三文証、（三）五味半満相成、（四）明合不合、（五）通別料簡、（六）増数明教の六項からなるが、その第二項には方便品と無量義経と信解品の三文を引証している。このうち法華経信解品の長者窮子の譬を引く際に涅槃経の五味の譬をも合せ引いて、擬宜・誘引・弾訶・淘汰・開会の次第が示されている。而も三蔵の後に方等を説き、方等の後に般若を説き、般若の後に法華を説く際にこれを生蘇・熟蘇・醍醐の三味に配し、これを第三時教、第四時教、第五時教といつている。さらに第五の通別料簡の章には五味半満を通別に約する一段がある。このうち別門とは仏陀一代の化道の始終を五時に分つもの、通門とは五時の一々にまた通じて五時の説法ありとするもので、仏陀の説法には機類に適応した教化の妙用ありとするものである。この五味半満の通別を示した一段には、第二時、第三時、第四時、第五時の語が見られる。このような用例をみると、天台大師は五味と五時とを同義に使われており、決して五味は機根論、五時は教判論と、区別されてはなかつたのであるから、五時は五味に重点を置いた理解に改めらるべきであるということではなかつたのである。

七

最後に蔵・通・別・円の化法四教について私見をのべておこう。関口博士の指摘をまつまでもなく、法華玄義全十巻の

いずこにも蔵・通・別・円の四教の組織的叙述はないのである。そればかりか、維摩経玄疏においても、化法四教が説かれているのは、教相玄義の一段ではないとされる。しかも法華第十巻にある「この経は、ただ如来の設教の大綱を論じ、微細の網目を委しくせず」[11]の文をあげて、天台大師にありては頓・漸・不定の三教は大綱であり、蔵・通・別・円の四教は微細の網目にすぎないから、これを同格には扱わず省略されたものであろうといわれている。[12]しかしながら天台三大部その他の天台大師の著作には、四教や三観などの名がいたるところに駆使されているので、四教三観などについての素養を充分もち合せていないと、三大部は到底理解し得られないのである。関口博士がどれほど五時八教の廃棄を強調されようとも、蔵・通・別・円の四教は天台大師が大本四教義や維摩経玄疏に説いた組織整然たる仏教教学の体系である。したがつて博士がいわれるように、頓・漸・不定の三教は天台教相の大綱であり、蔵・通・別・円の四教は微細の網目だというが如きものでは断じてなく、化法の四教こそは天台教相の前提となるべき重要教義であるのである。

天台大師の教相論については尚論ずべき問題が多々残されているが、後日の論議にまちたいと思つている。

2 同　右　（　〃　）
3 関口博士の五時八教廃棄論への疑義（印仏研究二三の二）
4 教相と教理（智山学報二三・二四号（仏教と哲学））
5 教相と教判（佐藤博士古稀記念仏教思想論叢）
6 関口博士の五時八教廃棄論への疑義（印仏研究二三の一）
7 同　右　（　〃　）
8 五時八教教判論の起元（大正大学研究紀要六一）
9 天台教相論について（印仏研究二四の一）
10 経典成立史の立場と天台の教判（支那仏教思想論）
11 大正、三三、八〇〇b
12 教相と教理（智山学報二三・二四）